

昭和レトロ家電

増田 健一

昭和30年代は、戦後の混乱がひと段落して日本が大きく伸びていった時代です。とりわけ電化製品は、「三種の神器」といわれた(テレビ・冷蔵庫・洗濯機)を中心にさまざまな製品が登場し、人々の暮らしは大きく変わりました。それまでは、ご飯は自動では炊けませんでした。お母さんは、1時間早く起きてご飯を炊く準備です。洗濯機は多くの家にはありませんでした。夏の炎天下、また冬の冷たい水でタライにしゃがみ洗濯板でゴシゴシ。そしてテレビや冷蔵庫もないのですから、扇風機で涼みながらナイター中継を見て、冷えたビールで一杯というわけにいきませんでした。

その頃のメーカーの姿勢は、お客さんの要望があつたらとりあえず作ってみよう。電気のできるものは製品にしてみよう…だったようです。それは時として勇み足だったり、アイデア倒れに終わったものもありますが、それが後年、世界を席卷するテレビやビデオなどの礎になったんだと思います。

私はそんな昭和30年代の色々な製品を見ると、むしろヒットしなかったモノにこそ「よくがんばったねえ〜」といとおしさを感じます。「どんな思いで作らはったのかなあ」「買った人は使ってみて便利と思ったんやろか」当時の人たちに思いを馳せてみます。

これから私の昭和レトロ家電コレクションの中から、そんな製品たちをご紹介します。先人の工夫、またその頃の日本の元気や勢いのようなものを感じてもらえればと思います。

東芝 スナック3 HTS-62 (昭和39年 3,500円)

あわただしい朝に、トースト、ホットミルク、目玉焼が一度に調理ができるという東芝の「スナック3」。当時は洋食の朝食に憧れがあつたのかもしれませんが、使い方は見ての通りトースター・ミルクポット・ホットプレートでそれぞれを調理します。取扱説明書によると「2つまたは3つの調理を同時になさるときには所要時



(写真提供 山川出版社)

間の長くなるものからセットしてください。まずミルクを入れ、2～3分たった次はプレートに卵を落とし、最後にトースターにパンを入れる」とのこと。まさしく同時進行で3品完成ってところですよ。宣伝文句は「スナック3をスピーディーな朝食などにフルにご活用ください」。でも調理の間は、朝の忙しい時にこのスナック3の前にずっと居なければいけないわけで…。段取りがいいのか、いささか微妙～ではあります。



早川(現 シャープ) 自動ハサミ「クイッキー」(EV-990 昭和36年 1,750円)

シャープがお台所の電化の次に考えたのが“お裁縫の電化”でした。「ハサミが電化されました。かるく握ったままで、滑るように切れる…、シャープ自動ハサミは、日本で初めてシャープがおおくりする画期的な新製品です。



自動ハサミ「クイッキー」(写真は後継のEV-991) (写真提供 山川出版社)

クイッキーは素晴らしい性能の持主で、特に刃は毎秒60回微振動しますから複雑な曲線切りはまさに「クイッキー」の独壇場です。牛乳1本12円の時代に1,750円。牛乳約150本分。かなり高価ですが、縫製業者やデザイナーさんに発売当初は結構売れたようです。

新発売

Sharp

クイッキー
(EV-990)
高級ゼニールケース入
定価 1,750円

はじめて「自動ハサミ」誕生!
※タンひとつで思い通りの線を切る

スーッと前進させてゆくだけ、ペンで線をひくような手軽さで思いのままに
裁断できるハサミを、はじめて、シャープが実現しました。
鮮やかな切れ味で、まっすぐ、急カーブと自由自在。しかも、電気カミソリ
と同じように、絶対安全な新しい機構になっています。
お裁縫・手芸の必需品として、ご家庭ではもとより、職業用にも好適。今ま
での2倍の性能をお約束いたします。

山田電機・シャープ電機

両面ダイヤル式電話機「ボースホン」

製造：岩崎通信機、発売：日東通信機（昭和38年 9,700円）

ひとつの電話機にダイヤルが2個付いていて、机をはさんで両方からダイヤル出来るという「夢のテレホン！ ペアードダイヤル方式ボースホン」。もちろん電話をかける先は1回線だけです。当時は電話回線が少なく、また回線を申し込んでもすぐに引く



両面ダイヤル式電話機「ボースホン」

ことができなかつたことから、このようなアイデア商品が生まれました。主に新聞社やテレビ局で使われたとのこと。しかし使う際に、一方の人は右手で受話器を持ち、左手でダイヤル…という図になってしまうので少々使い難くそうです。発想はとても面白いのですが、そんな理由からかヒット商品とはならなかつたようです。



早川(現 シャープ) テレビ型ラジオ「シネマスーパー」5S-85 (昭和31年 10,900円)

昭和28年、テレビの本放送が始まりました。しかし、当時のテレビ受像機は非常に高価。高卒の国家公務員初任給が5,400円の時代に20万円前後…。そこで気分だけでもテレビを味わおうと、外観がテレビの形をしたラジオが早川電機から発売され



テレビ型ラジオ「シネマスーパー」5S-85

ました。「テレビを形どったラジオのニューモード」(『シャープニュース』昭和31年8月)という触れ込みでした。価格は10,900円。その頃のテレビは14型で8万円。たしかにテレビよりは安いとはいえ、けっして安い買い物ではなかったはずです。

「お父さん、けったいな(変な)ラジオ買ってこんといて!」。このラジオをめぐってそんな夫婦ゲンカもあったかもしれません。

松下(現 パナソニック) 電気自動皿洗機 NR-500 (昭和35年 59,000円)

一見すると洗濯機のようなのですが、実はこれ電気自動皿洗機。今でいうところの食洗機です。発売は意外と早く昭和35年。松下電器曰く、これが日本初だそうです。しかし高卒の国家公務員初任給が7,400円の時代に、59,000円と高価なこと。5~7人の家庭用には場所はとること。また一回洗うと100Lと、水を大量に使うこと。そして「食器を機械に洗ってもらうなんて」という当時の常識。残念ながら普及しませんでした。しかし工夫を重ねて50年、節水や小型化が進み、また主婦もどんどん外で働く世の中の到来もあり、ようやく食洗機の時代が訪れました。



電気自動皿洗機 NR-500 (写真提供: 山川出版社)

東芝 自動式電気釜 ER-4 (昭和30年 3,200円)

この一品で、日本の台所の電化は幕を開けたといっても言い過ぎではないでしょう。昭和30年に東芝から発売された自動式電気釜。スイッチひとつで失敗なく自動

的にご飯の炊ける電気釜の誕生です。今ではスイッチ一つで簡単にご飯を炊くことができますが、当時は途中の炊き具合、また炊く量や季節により、火加減・水加減を人間が勘を頼りに調節する必要がありました。焦げたり芯があったりと失敗も結構あったようです。



自動電気釜(写真は翌年発売のER-5)

Toshiba 新発売
御飯も科学的に炊く時代です！

寝ている間に正確に美味しく炊ける

「たふスイ」チを入れておくと炊き始めに自動的に切れて、焦げないお飯が炊けます。炊き始めの加熱が快いです。

特長
①日本最初の自動式で、おいしいお飯が炊けます。
②標準的なスイッチ機構で炊き上げと自動に切り替わります。炊き始めは自動の間に意外な量の湯を注ぎ、炊き上げまで炊く必要がなくなり、炊き上げが間違いないで、炊き上げが正確です。

③経済的
自動の加熱により、節電モードのため、無駄な電力の消費がありません。

④維持が容易
釜蓋の内面についている湯の溜りにして、たふスイを入れるだけで、炊き上げ、炊き始めの電力から節電使用が可能です。

⑤掃除が容易
釜の内面に、洗淨し、ふき拭くだけで簡単に掃除できます。自動スイッチ・自動式機構の構造が簡単で、修理費が安いです。お湯・取出しは、水漏れ防止の構造が採用されています。

⑥自動スイッチ・自動式機構
自動式機構を採用し、炊き上げと自動に切り替わります。炊き始めは自動の間に意外な量の湯を注ぎ、炊き上げまで炊く必要がなくなり、炊き上げが正確です。

●中型(2-6人) 600W
●炊き上げ時間 約45分
●価格 ¥3,200
●型式 ER-5(19)

近日発売

東芝 自動式
電気釜

東芝電気株式会社
東京芝浦電気株式会社

『家電今昔物語』(山田正吾・著 三省堂)によると「ご飯の炊き方ひとつで、お姑さんからやかましく言われていた私たちの苦勞を、娘にはさせなくなかったがこれで解決しました」、「家事見習なしですぐ花嫁になれる」など、東芝には多くの感謝の言葉が寄せられたそうです。

いかがでしたか。昭和30年代に発売されたアイデア豊かな製品、意外と早くに実用化されていた製品、そして暮らしを大きく変えた製品のいくつかをご紹介します。当時の人たちは、こんなに便利になるのなら「お母さんのために洗濯機を買おう」、頑張って働いて次は「テレビを買おう」、「冷蔵庫を買おう」。今度はどんな製品が出てくるのかと期待し、またメーカー側も「こんな製品ができました、これで暮らしが便利になります」と、さまざまな製品を発売したのだと思います。そんな当時の雰囲気伝わりましたでしょうか。

さて、私のコレクション展「お正月だよ！今年もよろしく 昭和レトロ家電～マスタコレクション展～」が2月14日まで、天六にある大阪くらしの今昔館で開催されます。さきほど紹介したような製品のほかに、今回は昭和30年代の食品や薬などのポスター約40点を展示します。こちらへもどうぞお越しください。

ますだ・けんいち:大阪くらしの今昔館 特別研究員